

せたかむい

発行 古平町史編纂室
文化会館 8422590
第191号 平成17.8.1

年表で読む

古平の歴史

《97》

カレイ漁 ③

■鰈刺網組合を組織

カレイ業者が多くなったことから、大正三年、二八人が参加して刺網組合を組織しました。

これには出漁の時間、操業中の約束ごと、網を流失したときの処置、相互の救難義務などを定めています。

■本州方面にも出荷

カレイは鮮魚として、明治四〇年頃から余市・小樽・札幌などのほか、青森・東京方面にも輸送していました。

鮮魚の道内への輸送は帆船でしたが、大正一〇年、丹後藤三郎が川崎船渠丸(二丁)に電気チャッカー八馬力を取りつけ、小樽へ

の鮮魚輸送をしていました。また、漁業者が直接本州方面へ出荷していた記録があります。

大正九年(月日不明)

青森市安方町魚市場 千葉伝蔵

柏木大次郎殿

真カレイ 目 三十五銭

石カレイ 三十銭

浅葉 十七銭

黒カレイ 二十五銭

生鮓(シラウオ) 十七銭

売行良好ツミタノム

(出荷の追加を付記している)

大正一〇年、港町の斎藤佐太郎と南達達治が共同で、中型発動機船による手繰り網の許可を得て

石狩湾内で着業しましたが、資源保護の問題から二年で中止しています。

また川崎船、保津船による手繰り網業者も、次第に資源が減少したことから廃止する者が多くなってきました。

大正一一年、浜町吉井市松がカレイ底建網の許可を得ています。

古第一号

漁業許可証

古平町大字浜町四十三番地

吉井市松

一 漁業ノ名称 鰈底建網漁業

一 漁業場所 古平郡沿海

一 漁獲物 鰈

一 漁業時期 八月吉日

式月式拾八日

一 漁具員数 底建網一統

一 漁船ノ名称員数 川崎船隻

一 従業者員数 四人

一 許可期間 五ヶ年

一 条件又ハ制限 一、古平漁業組合専用漁場区域内ニ於イ

操業スヘカラス

右漁業ヲ許可ス

大正拾壹年参月拾日

北海道庁後志支庁 印

カレイ・ヒラメは延縄、手繰り

網、刺網、発動機船は手繰り網

底建網によつて漁獲していましたが、次第に刺網が多くなつてき

ました。

大正年間のカレイ・ヒラメの漁獲高は次ぎのようでした。

■底引き網による紛争

大正六年頃になりますと、小樽を根拠地とする大きな資本を持つ機船底引き網漁業が始まり、大正八年には全道で一八隻になったことから、大正九年、道庁は機船底引網漁業取締規則を制定しました。しかし大正一一年には全道の機船底引き網漁船は三〇七隻にも増えて、石狩湾沿岸の漁業者との間に紛争が起きてしまいました。

カレイ・ヒラメの漁獲高

年 度	漁獲高(貫)	金額(円)
大正 6 年	45.600	4.752
大正 8 年	39.800	20.550
大正 10 年	127.100	76.780
大正 12 年	63.020	38.420
大正 15 年	70.400	21.400
昭和 4 年	74.520	19.756
昭和 12 年	37.750	15.887

大正一三年 続

▼三月一〇日

毎日毎日寒いことだ。三月に入りこんな寒く雪の降ることは珍しい。店は早くから相変わらず忙しい。熊さんと二人、小便に行く暇もない。刺網一〇〇〇間、現金六〇〇間、計一六〇〇間も出た、今頃一日で一〇〇〇間以上出たというのは予想外だ。殊に出足平から二〇〇間と四〇〇間の現金買いは上客で万歳であった。何と言つても商売のお陰、専心、家業に努力すべしだ。アバ縄も三〇丸から出た。柿シブは家が一軒だけより売ってないので、一合九〇銭でどんな売れていく。

▼三月一一日

昨夜から雪、今朝になって三寸程も積つていた。起床八時、朝のうちは青空だったが、午後からまた雪降り寒さも加わった。少しも春の景色がない。余市辺りでは網下ろしのところもあり、古平でも一五日頃にはやるといふのに、この頃になつて雪がだんだん多くなるようだ。店もか

なり忙しいが、昨日よりは少しヒマだ。タラ釣り連は去る四日頃から集り、目下、延縄やその他準備中だ。刺網の早いところは支度が出来、沢江辺りではカレ網やスケソ網も投網しているが、大漁だとて人氣がよい。佐渡の安藤から改良一〇個、中川から双カセ一〇個を小樽へ船積みで送つたとの通知がある。早速田へ古英丸に積み込み方を依頼

高野名幸作さんの日記から

《102》

当時の世相を見る

頼する。明日は幸治が小樽へ受験に行くので、今夜支度する。

三年ぶりで小樽へ行けると言つて大喜びだ。今日は新聞を見る暇もなかった。

▼三月一二日

就寝中、電話やら客が来て忙しい。値段の問い合わせやら、その他用向きで熊さんも忙しい。建網よりも刺網連がエライ意気込みだ。殊に本年のオミクジが

良かったとか。水産試験場の調査船によれば、一般に大漁だろうと新聞にも出ているので、前景気は非常によい。町中を通る人も、この頃はいそいそとしていて元気がよい。刺網、今日も四〇〇〇間、高橋一〇〇間、外現金で二〇〇間、合計七〇〇間出た。あと一三〇〇間だけ、これを売つたら仕入れはせずタナ掛が多分二五〇〇間程あるから、

それを売る計画だ。四月二〇日頃までには売り尽したい。さすれば明年からは、また仕入れを考えねばならぬ。幸治、一四日から庁商の試験があり、今日はナギで連れもあるので富丸で行く。妻は浜まで送つて行く。岡崎へは電話で依頼する。私が小学校を出て岡崎の世話になったことを思い出す。二二、三年前のことだが、今は子供が中学校

へ行くべくまた世話になるといふ、実に感慨無量だ。夜、長尾跡の新床屋へ行く。静かな空に星が輝き、明日は晴天ならん。父の容態も日増しによく先ずは安心した。今頃、幸治は活動写真でも見ているだろうか。

▼三月一三日

起床八時、寒いこと寒中と変わりがない。朝は二八度Fであった。三月に入つてもこんなことは珍しい。馬車屋と出面二人で雪引きをやる。店は相当に忙しい。漁の支度も九分通りできた。刺網連はいかり網、アバ縄麻などが売れる。建網も一五日には八分どおり網下ろしというから、一七、八日頃には店の方は全くヒマになるだろう。今日は刺網一〇〇間だけ出た。店はかなり忙しい。アバ縄は目も品切れになり、浜町は一手販売だ。細も中も予想以上の売れ行き万歳だ。夜、原田さん宅で部落会例会があり行く。厳しい寒さだ。いろいろと時事も談じ、一〇時帰る。大阪のおじさんへ久しぶりで手紙を書き、一一時休む。

▼三月一四日

起床八時、店も今日は余程ヒマになった。二、三日前には、

▼三月一五日

就寝中にも電話や客でずいぶん忙しかったが、最早支度もたいいてい一段落し、今日から明日にかけて網下しをやる場所まで進んだので、店もヒマになった。鎌田さんは今日で三日も雪引きだが終わりそうだ。古英丸が来て、佐渡からのアバ縄二〇個のうち一〇個が着いた。小樽で積み替えたので、一個二円二〇銭もかかってしまった。古平で買うのと同じ値段になった。安藤、中川へ交渉、小樽、古平間の運賃だけ、一個につき五、六〇銭勉強させねばならぬ。午前一〇時、久し振りに浜へ出て見る。まだ陸は一面の銀世界で風も寒いが、海は春らしく、カモメも空高くたくさん飛んでいる。船も出て網こしらえも出て元気がよい。今日網下しのことだ。カレ縄も大漁、ほとんどが満船して帰る。午後三時頃から急に大吹雪になった。夜、困へ行き主人といろいろと話を

も協議する。

早彼岸も近づき、鯨場の準備もでき網下しをしたというのに、毎日のような雪と寒さには驚いた。今日もちよつと青空を見せた。ただで寒く雪も降る。風も冷たく寒中のような。例年なら今は子供らが浜へ出て、相撲をとるやらコマ回しなどをする。磯に出て海草取りの季節なのに全然見られない。店は刺網二〇〇間現金で売る。アバ縄、いかり網がずいぶん出る。今日も一三丸出た。今日は吉日というので網下しの祝いがあちこちであるが、浜では大漁旗を立てて賑やかだ。町中では祝いの餅を配ったり、そうめんや砂糖を配達する人などで賑やかだ。④から網下しの餅をもらう。夜、父、吉治、トミらと④の網下しを見に行く。踊り、民芸など、胴上げもしている。ずいぶんおもしろかったと喜んで帰って来た。

▼三月一六日

今日もチラチラ雪が降り出し寒い。午前一〇時頃、浜へ出て見る。まだ雪が多く、④の漁夫が納屋場へ杭を立てるのに雪消しをやっているが、まだ五、六尺も積もっているのには驚いた。店は閑散になる。悦三をおんぶしてまた出て見る。共栄丸、本年初航海の試運転をやっている。満船飾で走っているのを見て悦三が喜ぶ。カレ縄では赤ガレがかかっているが、まだ生きている。④漁場では昨晚網下しのあとの後引きでイッパイやっている。三時頃、幸治の受験の模様を聞くと思つて岡崎へ電話をかけた。算術が満点で、外も八分どおり出来たとのこと。たいい大丈夫だろう。夜、八へ佐渡からの用事で行ったら網下しだった。帰り③に寄り一時帰る。今日初めて金魚売りの声。

▼三月一七日

起床七時、今日も寒い。朝のうちは晴れていたが、一時頃からまた雪が降り積もること二月中のようだ。店はいよいよ閑散となる。アバ縄少しと麻糸、刺網一〇〇間出た。午後一時、火防組合の巡回がある。私は明日から佐渡行きなので、いろいろと事務の整理をする。幸治から何の連絡もなかったもので如何と思つていたら、二時頃の富丸で帰って来た。試験の結果は八分どおとりの良かったので大丈夫のことだ。この日、成田船頭とイワシ網のことについていろいろと話を有難いので今春からやつてみたいとのことだ。

▼三月一八日

今日は佐渡へ出発する日だ。七時起床、支度をする。本店の主人も来てくれる。鶴間へ行き話をし、ヒサさんを連れて九時出帆の富丸に乗る。今日は建網の型入れをするところが多い。この分なら今年の鯨漁も遅れることだろう。私の帰るのは四月五、六日の予定、それまでに大漁して、町民の笑顔を見たいものだ。一〇時半余市に着き、④甲谷に寄り用足しをする。一時半の汽車で小樽へ出る、二時半に着き待合室でソバを食べ、手荷物を預けて岡崎さんへ行く。話しをし、休んでから商用に出かける。八、田、傘などに寄り、カレ縄用のウルシ塗りアバの件について話す。五月始めには売

り込むつもりだ。「半カッパ屋で熊皮の見切り品あり、二八円で買う。半値に近い。七時に帰り夕食後、ユワさんの家を訪ねて三〇分程話をする。九時半頃、停車場へ行く。ユワさん夫婦、岡崎誠治さんに見送られ一〇時五分発の汽車に乗り込む。汽車は混雑している。ウツラウツラしているうちに六時函館に着いた。寒く二月頃のような。

▼三月一九日

函館に着いて待合室で休み、朝食に親子どんぶりを食べた。洗面後に古平に手紙を書く。七時半発の田村丸に乗ったが客が多く混雑、私たちは荷物積み込み口の上にウスベリを敷き、その上にいる。雪が降っていたが波は静かで、一二時青森に着いた。田村丸の客室を見たがなかなか立派だ。青森は棧橋が出来ていて、そこに田村丸が横着けしハシケはいらないのだ。五月頃には新式の貨車運搬船が通うというが、ますます便利になるだろう。青森停車場までの長い距離、カバンと荷物を持って歩き閉口した。青森はまだ沢山雪

がある。待合室で休む。昼食をすませリソゴを買う。二時三五分発の汽車に乗ったが、車中は混んでいなくて楽だった。函館までの汽車は急行なのであんなに混んでいた。かえって並の方がよかった。車内で夕食、仙台は夜中を通った。

▼三月二十日

今朝の六時、郡山に着いた。洗面し、朝食後すぐ汽車があつた。郡山は雪は無かったが、会津若松辺りから周りの山はもちろん、田畑も屋根も沢山の雪であつた。車中は客も混まず楽でよかった。新聞で潜航艇沈没、航空機火災(一九日)、の惨状を見、わが海軍の打撃大なり。新津から少し手前のところで機関車が脱線、五、六〇人の人夫が工事中であつた。聞けば一〇日程前崖崩れのため脱線転覆、五、六人が死亡、負傷者もあつたところのこと。なかなか危険なところだ。一二時四〇分新津着、早速人力車に佐渡行きがあるかと聞いたら、三時半出帆、しかも新造船第八佐渡丸とのこと。荷物車に乗り、八佐渡屋に着く。荷物

はまだ着かないので佐渡屋へ頼み、三〇分程休んでからハシケに乗る。三時半出帆、ナギでまるで夏の海のようなである。甲板から新潟河口、築港など眺めたが壮観であつた。川には沢山の船が停泊している。七時半エビス着、八時上陸する。自動車に乗ったが、道路がよいので乗り心地もよい。九時過ぎ、懐かしい吉岡に着いた。十五夜の月がこうこうと輝き、印象深かった。

▼三月二一日

起床八時、一八日からの旅行でずいぶん疲れたので心地よく休んだ。芳太郎さん、竹田姉さん、母さんらという話をして。圀老人も来られた。今日は彼岸の中日、松山大願寺で彼岸市があるというので、芳太郎さんらと見物に行く。商品が沢山出ていて賑やかだ。佐渡の人情や風俗を見た思いがする。何よりであつた。四時頃帰る。夜、皆と北海道の話をする。十六日の月も輝いて良夜であつた。

(二二日、二四日 欠)

▼三月二五日

起床九時、昨日は赤泊から大

石、小泊、曲田と廻り、約九里以上の強行軍をやつたのでずいぶん疲れた。つい朝寝をした。今日は一日休憩日。中畑老父、④主人、藤吉の母さん、長助の姉さんらが来てしばらく話した。昼食後、土産物が届いたので親戚や知り合いに配り、五時頃帰る。風の寒いこと今にも雪が降りそう。北海道はどんなだろう。こたつにあたりながら一〇時頃まで話をする。

▼三月二六日

佐渡の土地は何となく懐かしく、落ち着いた心地がする。殊に今朝は春雨がシトシトと降り、床の中でスズメのさえずりが聞えて、ワラを打つ音までも聞こえてきて、田舎の春の朝は殊更気持ちがいい。七時半起床、洗面後、村社へ参詣する。境内の老樹、幾百年を経たようなのが沢山ある。帰って朝食をする。妻から手紙が来ていて、見ると二日の終業式では幸治、文治、トミが揃って優等賞をもらい、幸治は六年生の総代であつたとのこと。先ずはよかった。鍊はまだ早く、スケソは大漁、サン

パに一、二杯あてとれたとのことだ。鯨も月末までには吉報があるだろう。午前中二、三軒廻りいろいろ話をする。帰ると中

を聞きたいものだ。中川の芳夫さんめめでたく中学に合格したとのこと、良かった。

煙から馳走があるというので迎

▼三月二十八日 起床六時半、

えがあり行く。老父やヒサさん

近頃で一番の早起き。空を見る

らと煙の辺りを見て歩く。三時

と、曇り空からチラチラ雪が降

頃帰る。五時頃園から迎えが来

り、寒い寒い日であった。この

たので行く。与太郎さん、ヒサ

分では鯨漁もダメとあきらめ、

さんらも一緒に馳走になる。そ

朝食前、芳太郎さんと真野宮に

の最中に古平から電信がくる。

お参りに行く。何と風の寒い日

「コウジゴウカクシタ」と、先

だ。境内も立派になり、何とな

ず良かった。いろいろ話をし九

く神々しい。帰ったのは八時。

時帰り、湯に入り日記を認める

朝食後、城之内主人、主人ら

▼三月二十七日

を訪ねいろいろと話をする。午

起床七時半、ウグイスの声を

後一時から新町の新盛座で護憲

聞きながら休んでいるのも心地

三派政談演説会があり、高太郎

良い。古平へ昨夜手紙を書いた

さんらと聴きに行く。二時から

のを投函する。午前中、島方さ

始まり、現内閣の倒閣、政友会

んへ行きいろいろ話をする。後、

の攻撃だ。四名の弁士で四時半

中畑さんへ行き昼食を馳走にな

に終わる。帰りエバヤキを買う。

り、④のことについても話をす

外套を着ないで行ったので寒か

る。与太郎さんの嫁のことにつ

った。実に寒中のようにうだ。

いても協議する。滞在中に何と

▼三月二十九日

かして決着をつけたいものだ。

起床七時、朝のうちは曇り空

酒、ソバを馳走になり六時頃帰

であつたが、次第に晴れてきた。

る。北海道の今頃は如何。鯨漁

午後から自転車で稲鯨へ向けて

も迫り、一日千秋の思いで待つ

出発する。川原田、⑤商店へ行

ていることだろう。早々に便り

く。初対面だ。一五分程話し、

五十里沢を通り山中に入る。自

半、道路が良いから自転車なら

▼三月三〇日

三〇分程で楽だ。途中の海岸も

昨日稲鯨に着き、忠兵衛さん

景色の良いところがある。煙で

方二階で心地よく休む。ここは

は麦へ肥料をやるのに一生懸命

父の出生した所だと思うと懐か

だ。この辺りはムシロ作りが盛

しい。七時起床、空が晴れて気

んだ。大浦神社は安産の神様と

持ちが良い。洗面早々、浜通り

のこと。安泰を祈り帰途につく。

に出て見る。あちこちの岩礁、

この頃からポツポツ雨になり、

遥かに小木の崎辺りに沢山の漁

万太郎さんが外套を持ってきて

船が出ている。今日はナギなの

くれる。周りの景色を眺めなが

でタラ釣りやスケソ釣りの船は

ら一一時半帰る。万太郎さんの

皆出たとのこと。朝食後本間さ

家白玉を馳走になる。この頃

んを訪ね、しばらく話をして、

時頃から晴れた。帰宅すること

九時頃、大浦神社へ参詣に出か

になり、皆さんに送られ、お土

ける。稲鯨から橋までは少しの

時、沢根に着き、四時半川原田

坂を登れば一望平坦だ。高瀬を

に着く。⑥で休み佐渡中学校を

過ぎ、大浦に着いたのは一〇時

見る。高台にあり見晴らしが良

い。六時半帰宅する。酒を馳走

されているところへ、園で二八

日の樽新を持って来てくれた。

見れば幸治が一四番で入学した

ことが出ている。六〇〇人から

の受験者があつたのだから上成

教科書のいまむかし

◇家族国家という考え方

この二期の修身教科書では、家族国家という考え方が強化されていました。

『国は家族制度を基にした一大家族である。皇室（天皇）は私たちの宗家本家で、国民は子供が親に敬愛の情を示すように、万世一系の天皇を敬わなければならない。そこで忠と孝は一つである。忠という天皇への奉公も、孝という親への奉仕も、共に一大家族である』というふうに解釈されているのです。

◇義務教育の延長

国定教科書が実際に使用されたのは明治三十七年からで、この年は国語・書き方・修身・歴史・地理、三十八年には算術・図画、四十三年になって理科と

いう順番でした。

ところが三十年代の後半になると、教育が大いに普及し、関心も高まってきたことから、義務教育延長の声が強まってきました。

四十三年三月『小学校令』が改正され、それまでの尋常小学校の修業年限四年が六年となり、これが義務教育となりました。そして、これまでの高等小学校一・二年で学んでいた教科目が、そのまま尋常小学校五・六年に移されました。

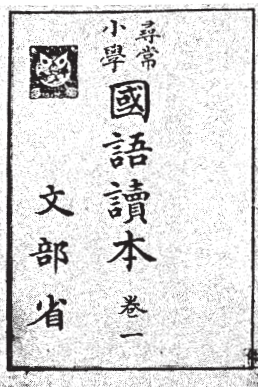
義務教育が二年延長されたが就学率は順調に上がって、九十八パーセント台からは下がりました。

そして義務教育六年制は、さらに延長することも検討されましたが、これは終戦後の教育改革までの四十年間、改められることはありませんでした。

◇大正時代の新教育

大正時代に入ると間もなく第一次世界大戦が起こり、それによって社会の動きや国民生活にも大きな変化が生まれました。大戦によって日本は大変な好景気に恵まれ、国民の生活も向上したことから、教育についても今までより高い教育を望むようになり、上級学校への進学の見込みが高まってきました。また、大戦後の新しい民主的な思想は、学校教育にも機会均等という考え方を広めることにもなりました。

← 新しい時代に新しい教科書



諸外国でも新しい教育の流れが生まれて、それが日本にも入ってくるようになり、今までの教育から進んで、生徒の自由な活動と個性を尊重しようとする

いう教育が叫ばれ、今までの授業に対する反省から、新しい実践をしようとする学校が各地に見られるようになりました。

先の第二次大戦後だけではなく、この時期にもアメリカから新しい教育の考え方が——新教育の思想が入ってきました。それまでの教師中心の教育から、児童中心の教育へと一八〇度の転換がなされ、教授という言葉が指導、授業を進めるための教案を指導案と呼ぶようになったのもその一例です。

しかし、大戦後間もなく世界的な不況になり日本も大恐慌に襲われました。こうなると、生活上の不安から労働運動や社会主義運動が活発になってきました。

大正六年、このような情勢の中で、教育改善の方策を確立しなければならぬという要望が高まり、文部大臣によって臨時教育会議が設置されることになりました。状況は違いますが、世の中が混乱すると教育の改革が叫ばれるのは、今の時代ともよく似ています。

この会議での結果は、大正七年から昭和の始め頃にかけての教育改革の根本として、その時期の教育改革のほとんどはこれによって行なわれるようになったのです。

← 童話 童謡雑誌で、それまでのおとぎ話を文芸的に高めた



◇日本人と国定教科書

日本人の教科書に対する感情には特殊なものがあると言われています。特に戦前の教育を受けた人達は、教科書は特別なものとして大切にしています。これは日本の教育が伝統的に教科書を教える——という、いわゆる教科書が中心の教育であったことによるものでしょう。ですから教科書は広く国民に大きな影響を与えてきたといえるでしょう。

このような教育のあり方からこの家でも教科書は大切なものとして、たとえ火事になつても祖先様の位牌ほどではないにしても、非常持ち出しのひとつだという習性みたいなものがありません。

これはアメリカなどのように、教科書が教室に備え付けになつていて、生徒はそれを借りて使うという国民にとつては、ちよつと理解できないことかもしれません。国定ですから全国でみな同じものを使い、絶対的なものとされていましたが、取り扱うときのしつても厳しいものがありました。

こうした戦前の教科書に対する考え方で育った人にとつては、再び見る教科書というものに大いに郷愁を感じるわけです。これを見ることで自分の成長の足跡を見出すのではないかと思われるのです。古い教科書の復刻版が出版されているのはこうした事情があるようです。

教科書というものは、年とともにいつそう懐かしく思われ、

そして誰でも、とりわけ一年生で習った国語の最初の言葉ほど忘れがたいものはないようです。

このように教科書は、日本人一人一人に大きな影響を与え

← 新しい一年生の国語教科書
その後昭和八年まで使われた



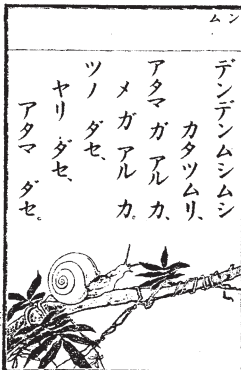
てきたので、日本人の教育にとつては特に重要な意味を持つものと考えていいでしょう。

◇興味のある教科書

大正七年から使い始めた三期の国定教科書になると、国語は「ハナ ハト マメ マス」から始まり、今までは黒い表紙であつたものが、やや明るい灰色の表紙に変わりました。

この頃はちょうど第一次世界大戦が終り、大正デモクラシー（民主主義）といわれる時代でした。

← 一年生国語・前期の学習



戦時中と戦後わずかの期間でしたが好景気と、外国からの文化が流れてきて、今までと少し違つた、何となく民衆の力が感じとれるような時代でした。

（続く）

◇三県一局時代

明治一五年一月、開拓使長官の黒田清隆は、開拓使官有物を不正に払下げをしたという理由で免職となり、後任に農商務卿(農商務大臣か)西郷従道が兼務することになった。

西郷長官は、開拓使の十カ年計画が終わったものの、大してその効果が挙がっていないことから二月には開拓使を廃止して、北海道を三県に分け、開拓事業を主とする農商務省北海道事業管理局を置くことにした。これが三県一局時代といわれ、北海道庁が設置される明治一十九年一月まで続いた。

三県の区画は、これまで開拓使のあった札幌本庁、函館・根室両支庁をそのまま引き継いだ形であった。このように三県を設置したのは、開拓使十カ年計画が終わったことと、北海道を他府県と同じような機構にしたいという意図であったが、北海道の三県には県会がなく、要するに議会がないことで、地方自治のない特別な県であったということである。

また、一般の行政以外の開拓や官営事業などは関係する中央の官

北海道
三県分割図



「蝦夷地から北海道へ」 地方自治の移り変わり

庁に移されたため、開拓使時代のように統一のとれた運営がうまくできないのではないかとということから、先の事業管理局が置かれることになったのである。

しかし、実際には三県と事業管理局とは連絡を欠き、とかく権力争いも起きてうまくいかず、全体としてまとまった運営ができなかった。三県一局合わせて、役人の数は開拓使時代の二倍以上、三千人近

くにふくれ上がったが、反対に能率は低下した。住民にとってはいろいろな手続きが前より複雑になり、面倒になったのであった。

ところでこの三県時代、職を失った武士の救済が大きな問題であったことから、北海道への移住が盛んに行われた。しかし、開拓に良いところはすでに政府の高官や有力者のものになつていて、一般人や武士の入植した開拓地では、苦しい悲惨な生活を強いられた。

そこで、一時中断していた屯田兵

の募集が再開された。これは当時軍備の増強を図っていた軍部にとっても都合で、武士の救済と授産、北海道開拓、軍備増強とまさにこれは一石三鳥であった。屯田兵に応募したのは予定の四倍にもなり、実際に入植したのは当初の予定の二倍にもなった。

この頃の屯田兵は江別・滝川、太平洋岸の輪西(室蘭市)・太田(厚岸

町)・和田(根室市)に配置されたが、太平洋岸は立地条件が悪く、苦悶の生活だった。

◇集治監(刑務所)の建設

北海道の和人の歴史は流罪人から始まるといってもよいが、明治一〇年代、重罪人を北海道に隔離する集治監(しゅうちうかん)がつぎに建設された。明治一二年、内務卿(大臣)伊藤博文は、囚人に開墾や工業をやらせる広い土地と、良民に被害を与えない遠隔地としては、北海道は最適地である」と、意見を述べたが、それに沿って集治監がつくられたのである。

明治一四年樺戸集治監を始めとして、翌一五年空知集治監、明治一八年には釧路集治監がつくられた。開拓使があげた候補地は、十勝・樺戸郡スベツ太・羊蹄山麓だったが、石狩川の船便がよく、農耕道地としてスベツ太が選ばれた。

これは現在の月形町であるが、この町の名は初代典獄となった月形深の名からとったものである。当時村の名を決めるのに、月形としたいと申し出を受けた彼は、「月形死すとも月形死せず」と、大いに喜んだという。



愛染草

大 澤 文 子



本州各地の梅雨もあけ夏本番だ。

早朝から太陽がカツと照りつける。わが雑草苑の花ばなも、ひと際鮮やかな色彩をかもした。特に紫陽花の葉陰に……そして躑躅の花かげに……ひっそりと咲く青紫のつゆ草は愛らしい。

ふと走馬灯のようにわが心をよぎるつゆ草の思い出とは……大正十三年のあの頃、教職についていた父は、新潟市から海を越え佐渡高女に転勤となった。佐渡の町はさすがに楽しくあった。

どこの家々にもややせまい庭があり、垣根越しに青紫のつゆ草が咲きはこっていた。小学校へ通う道すがら、垣根越しにあふれるほど咲きはこるつゆ草に魅せられ、二歳年上の姉とそつとふれて見るのが楽しみだった。

小学校は佐渡高女の二町先くらいにあった。一年生の受け持

ちは小菅タマ先生だった。転校して来たばかりの私を特に優しく、席順も前から二番目にしてもらえたことを覚えてる。

その頃の小学校の女児達は、皆三つ編みのおさげ髪だった。おかつぱの児はいなかった。姉

と私も、毎朝母から三つ編みのおさげ髪に結ってもらっていた。今思うと忙しい朝なのに母

も大変だったのでは……と思う。大正時代のあの頃の佐渡高女

の制服は、ねずみ色と黒の縞模様の着物にえび茶の袴姿だった。毎朝、生徒達は学校の庭の柵につかまり、

「嬢ちゃん！ いっていらつしやい！」

と、かなきり声をあげて、私達姉妹を見送ってくれた。恥ずかしくて、姉と毎朝走り通ったことを覚えてる。

その一年後、また父は転勤により、津軽海峡を渡り札幌市に移り住むことになった。

南大通り西十九丁目に居を構

えたが、花好きの父は、早速広い庭に種々の花を植えた。父の一番好きな花は、石川啄木の歌にもある藍紫の矢車草であつたろう。

その花群の中に、家族全員理

もれて写した写真は懐かしい。

矢車草を特に愛した父は「母の日」に、白地に藍紫の矢車草が二輪、白い小さな蝶が一羽舞っている縞の帯を母に贈った。

それは母のお気に入りになった。その母も札幌に移転してから北海道の寒さに耐えかねいつも戦になやまされていた。

六畳間の柱に背をもたせ、指に軟膏をつけ、あかく焼いた火箸

で「あちち！ あちち！」と顔をしかめながら治療していた。

子供心にも痛々しくかわいそう

で、今でも忘れることはない。

その母の愛した花はコスモス

だった。荒風に倒れても、伏したままで陽に向き花を咲かせ

る。障害にぶつかってもなおも笑顔で立ち向かう。そんな日本

女性……母はそんなつよい女性

が大好きだった。

に野上弥生子女史を知らない人はいないであろう。

彼女の歩いた道はながく広く、そしてさまざまな花を愛し、一歩一歩努力しながら歩いた道はすばらしい。

「人は生きている間は何か仕事をせねばならない。私はほかの道を知らないので、こうして書き続けています」……と。九十七歳の時の彼女の筆である。

「読み書きもせず、何のために生きているの？」というのが、彼女の身上であつた。

一日に原稿用紙二枚を書き続け、白寿を祝う会にでも、

「おばあさんになつて途方にくれていますよ」

と、語つたという。

白寿になつても尚「途方にくれる」心のみずみずしさこそ、

最長老の現役作家であろう。

百歳まであと一か月余りというところで倒れた。惜しい作家であつた。知的作家として際立

っていた。

野上弥生子女史、いったいどんな花を愛されたのであろうか……

ふとそんなことを思いながら。真夜ペンを描いた。

札幌通信 第32信

苺の期節

吉 川 義 雄

南側にあるウラ庭の、一畳分程のところに妻と娘が苺を植えた。苺が、大分白い花をつけたなと思つていたら、

「こんなにナツていた」

と、妻が、葉っぱの上に五、六粒赤く熟れた苺をのせて持ってきた。

わが家は老夫婦と、慌てて生まれてきた末っ娘の三人だけの家族だから、苺を見てもあまり感動しない。暫く居間のテーブル上で、紅さをヒラケカシていたが、いつの間にか無くなった。

最初の収穫を終えた翌日から、あいにくの雨。部屋窓越しに苺畑の全貌は見えるのだが、負けじと雑草も伸びているので、収穫は雨上りを待つてのことだろう。古平時代。長男に生まれた私は、ババ子といわれて育った。順次に、七人も生まれた兄弟の中

で、長男であれ長女であれ、同居の祖母は、母親以上に孫の面倒をみなければならぬ。

育てられた私の方も、今もって祖母も祖父も、両親以上に懐かしく思い出されることが多い。

丸山川の源流に沿つてわが家の畑がある。独りでこなすには広すぎる畑だが、祖母は独り、黙々と山の畑に通い続けていた。ある日、珍しく畑行きに私を誘った。なぜか自信ありげな祖母の笑顔に誘われて、春の深まる山の畑に同行した。

「ドッコイシヨ」と、山道を運んで来た荷物を下ろしてから、再びイタズラっぽい笑顔を見せて祖母の案内した所は、流れの止まつた小川があり、それに沿つて、祖母が開墾したらしい畑があった。驚きの声を上げたのは私だった。全部が苺畑であり、真っ赤な実

が黙々とついていたのだった。

生まれて始めての体験だし、

「洗つてからケエヨ」

「ハレこわすなア」

の、祖母の声を背にして、私は夢中で口を動かした。

山の畑まで、祖母について行ける兄弟が増えた頃、私は苺畑を増やすことにした。

雑草しか無かつた所を懸命に拓き、今までの苺畑から間引きしたもの植えた。祖母は私の意図を知つて、

「離して植えろ」

とだけ教えてくれた。

楽しみができた。山の畑には祖母が誘わずとも季節が近づくと、祖母と同行する弟妹達が増えた。祖母の方も、絶対手ブラでは連れていかなかった。広い馬鈴薯畑があるから、冬の間用意した魚の頭など、肥料は山ほども家にあり、それを分に応じて、各自の背中に括り付けられた。

当初、私を喜ばせるための苺畑が、後には重要な、肥料搬送手段の一部を担う結果になったようだ。

昭和十一年の春。高二で小学

校を卒業した私は、祖母に連れられて札幌の書店に奉公に出た。「廁(かわや)の中で泣くなよ」が、祖母の別れぎわの言葉であつた。

苺の期節が六度程去つて、兵隊検査の通知が来た。指定の場所が余市町で、前日に古平のわが家に帰った。祖母は相変わらず畑仕事を一手に引き受けていて、私が家に帰つたとき、祖母も畑から帰つて来たが、何故か身体の調子がオカシイ。倒れるように寝込み、凄いのびきをかき始めた。医者診断では「脳溢血」で、すぐには動かせぬという。

翌日は私の余市行き、後ろ髪を引かれる思いで検査場の余市町に出た。大勢の旧友と久しぶりで再会したのだが、大急ぎで古平のわが家に駆けつけた。

大きないのびきはそのままであつたが、久し振りにシワくちやの手を握ると、次第に静かになり、冷たい手になつた。

「俺を待つていたのかよう……」

祖母は、私を廁どころか、大勢の人の前で好きなだけ泣かせた。苺の期節であつた。

中 戦

泣き笑いの
樺太漁場体験記

後 戦

吉 野 慶 一 郎

予想もしない危険な夜間の沖積み作業を強制され、疲れ果てて辿り着いた宿舎では、炊事兼留守番係があまり帰りが遅いので、もしや不測の事態でも起きたのではとひとり心を痛めていたらしく、皆の無事がわかると「よかったなアー」と、男泣きでした。

彼の用意した心づくしの晩餐に舌つづみを打ちながら、互いに健闘を喜び合い、この夜初めて安らかな寝に就くことができました。

翌日は住み慣れた番屋を取り片づけ後、早速、真岡漁業組合へ駆けつけ、仕事の終了報告と今回の手厚い援助に深甚の謝意を述べ、辛い別れを告げました。真岡漁業組合はあのときの命の恩人として、今でも忘れる

ことはありません。

思えば、命令系統が全く不透明で連絡も不十分な、ソ連軍の独善的な一部の幹部に引き回され、そして嘲弄されて、そのあけく捕虜か凶悪犯人でもあるかのように銃口を向けて、強制労働を強いられた私達の真岡逗留は何だったのか、改めて敗戦の悲哀と屈辱を痛感させられた日々でした。

歳月はめぐり、今年の八月十五日は、六十年目の敗戦記念日を迎えることになりましたが、その度について昨日のこのように鮮やかによみがえってくる、悪夢の一こまです。

その年の暮れもギリギリの三十日、列車が家族の待つ野田駅に着いた時はホッと、野田漁業組合に帰着の報告をすると、

急ぎわが家に戻りました。

家族も皆変わりなく、私の帰りと正月支度が待っていました。何はともあれ正月は餅だ、配給のもち米で家族ぐるみで餅をこしらえ、神仏にお重ねも飾ることができたのはせめてもの心の慰めとなりました。しかし、何を祈願したのかは覚えていません。

大晦日の除夜の鐘の響きもなく、神社は深い雪に閉ざされ手初詣もできず、元日の楽しみでもある年賀状も来るはずもない。賑やかだった商店街の初売りも福引きも全くない。雪の中でただ静かに時が過ぎていくだけで、ソ連の占領下での寂しい初めの正月風景でした。

退屈しのぎに親戚や知人が相互に年始廻りをして、一杯飲んではカラ元気で歌うときか、映画を見るひとときぐらいが正月気分でした。

一方ソ連人はいくると、彼等には特に正月らしく改まった行事もなく、何も変わらない平常通りの生活ぶりは、日本人の習慣から見て意外な感じでした。

無りよう(聊)を慰めるラジ

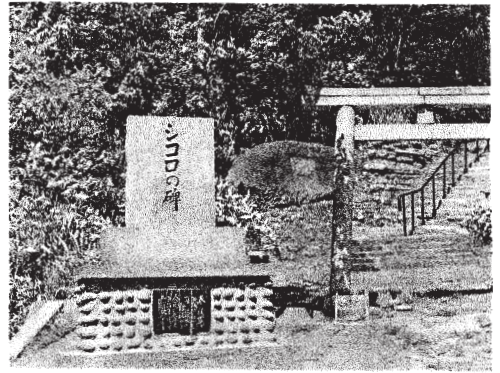
オを囲むのが家族の楽しみでした。故国の賑やかな正月風景や、華やかな演芸放送を聞いてはうらやまばかりで、最も知りたい樺太に関する話題や情報は全然放送されません。「忘れられた樺太」と、落胆と怒りの日々でした。

その後も割と平穏な生活が続き、正月も半ばとなった頃のことです。またも漁業組合に対して、ソ連から突然の通告がありました。それは、

「今年の鯨漁は、従来通り全力をあげて継続再開すること、特に建網業者で自営困難の場合は共同するか、またはソ連国営漁場に参加すること。労務用食料と資材は配給する。明日からでも直ちに準備に入れ」という、有無を言わせぬ厳命でした。

しかし、建網はそんな簡単なものではなく、これにはただ驚きあきれるばかりで、鯨漁に関する無知無能ぶりを自らさらけ出したようなものです。

だが終戦で全てが断絶し、と

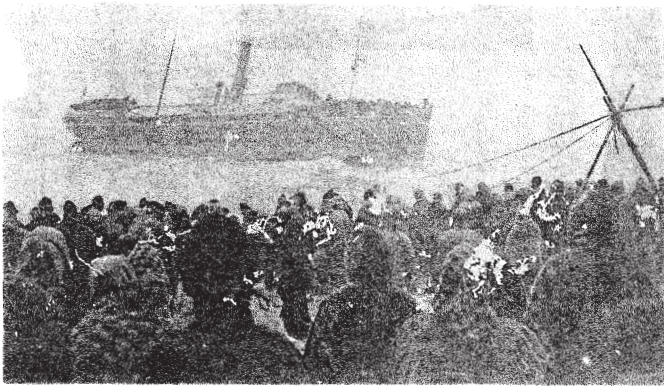


シコロの本に寄せて

瀧内 優子

天保十五年五月吉日寄進とあり古平巖島神社の鳥居は
中腹の社に至る石段は青磁の色なし板状節理に成る
参道の中ほどに建つシコロの碑黒き御影石は春日を返す
嵐の夜座礁の船に渡さむとロープ結びて風揚げしとふ
シコロ樹に繋げるロープに座礁せる船の婦女子らあまた救はる

張るロープに操る籠の激しく揺れて落下し溺死の人をも伝ふ
遭難の海は三日つづきて篝火を焚きての夜の救出つたふ
難破船の百余名救はれし二年後シコロの大木立ち枯れしとふ
難破船より救はれし幼子の老いてシコロの碑を建てしとぞ
春の海を社に見ればとろ風て遭難の海は唯にまぼろし



ても翌年の漁のことなど考える
余裕などはありませんでした。
最初に乗り込んで来たソ連兵の
暴虐により、浜の番屋や倉庫は
片っ端から壊され荒らされて、
放置されたままの船、網などの
漁具類、資材は果たして使用可
能なのか、それと人員が揃うの
か。従来は大泊市（現在のコル
サコフ市）から船頭が団体を
引率して来ていたが、今年は何
う不可能です。

それに加えて資金のことなど
問題は山積していました。とこ
ろが、何とこれを聞いた親父は
大喜びだったのです。

「多分、こんなこともあるうか
と実は待っていたんだ。今年も
建網漁ができるとはありがた
い。苦しくてもやれば出来るも
んだ。あくまでも自宮でがんば
り、ロスケ共を驚かせてやる。
アーいい気分だ。早速準備にか
かるゾー」

と、まさに水を得た魚のように
親父が元氣になったのには、実
は意外なことがかくされていま
した。

半田陣地陥落す

（続く）

ところがここには一人の守備兵もいないし、高射砲も北海道と千島へ移してしまつて今は

無い。その代わりに丸太造りの偽物の高射砲を据え付けて置いたら、敵はそれを本物と思い込み大砲を打ちまくっているということだ。バカな奴等だ。

ソ連軍の最高統帥部では、『八月一日一〇時を期し、樺太国境を突破し、八月二五日までに全樺太を占領せよ』と、北樺太の第一六軍司令官に命令を下していた。

樺太に侵入したソ連軍の主力部隊は、第五六狙撃軍団二万人、戦車一個旅団、独立戦車二個大隊という強力な機械化部隊であった。

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

32

橋 義 春

ソ連軍の戦車は独ソ戦で活躍したT34中型戦車で、重量三二ト、八五ミリ戦車砲を装備した鉄の塊だ。ところが我が軍には、

この戦車群に立ち向かえるような戦車は一辆も配置されてないばかりか、対戦車砲すらなかった。

どうやってこの鉄の塊の軍団を阻止するのだろうか。半田の陣地で、最初にソ連軍と接触したのは朝の五時頃であった。半田は国境から約四きのところ、半田川の川岸の手前に、中央軍道を挟んで両側に小規模な陣地が点在している。

（この陣地は、四七年後の平成三年にもそのまま残っていた。その年の八月、私は第一回樺太遺骨収集政府派遣団の一員として参加し、確認して来た）

この半田陣地に、大国少尉と

泉沢少尉の二個小隊が防備にしていた。最初に突入して来たソ連軍は、戦車五輛を先頭に火砲五門を持つ一個中隊の兵力だったが、大国・泉沢小隊は速射砲を連射し、挺身切り込み、肉薄攻撃をもつて完全にソ連軍の進撃を阻止した。

ソ連軍は戦況を挽回すべく、五〇〇名程の勢力をもつて両側から攻撃を仕掛けて来て、兵力の劣勢な我が軍は、これを見た泉沢少尉は部下を率いて半田川を強行突破し、敵の背後を衝く作戦に出たが敵の集中砲火を浴びて壮烈な戦死を遂げた。そんな中で、大国小隊も機関銃や速射砲も破壊され、残った兵力も敵の包囲下にあった。ついに大国少尉も切り込みを決意し、負傷者を後方に下げてから、

「泉沢少尉の敵をとる」と言つて、敵陣に果敢に突入し壮烈な戦死を遂げ、こうして大国・泉沢小隊は玉砕した。

ソ連軍史には、緒戦における大国・泉沢小隊の猛烈な反撃についてこう記されている。

「——第五十六軍団の攻撃前

進が開始された。第百十六狙撃連隊第二大隊は主力の前衛として半田拠点の前方に進出したが、半田側右岸において、日本軍の猛烈な反撃を受けて前進は頓挫した。我が前進経路は、多数の低伸弾道火器による濃密な火網にさらされ身動きができなかった。

正面攻撃に失敗したことを認めた師団長は、前衛大隊をもつて日本軍を牽制、その間、主力をもつて迂回するように命令した。濃い霧と深い草むらは迂回を容易にしたが、人跡未踏の森林と湿地帯は大きな障害となった。歩兵は樹木を伐採し、柴を敷いて道を作りながら前進した。このため戦車や砲は後方に残されたままであった——」

大国、泉沢両小隊は、国境警察隊を含めてもわずか百名足らずであった。この小兵力で、一個軍団のソ連軍を食い止めた力戦ぶりは高く評価されるべきで、戦車はおろか、対戦車砲も持たぬ日本軍の勇戦ぶりは、ソ連軍の師団長をも驚嘆させたのである。

——終戦後、捕虜収容所で、眼鏡をかけた背の高い将校が、半田陣地で重傷を負いソ連軍に収容された、ということをもソ連兵が言っていたと、戦友の石島信吉から聞いたことがある。大國少尉は私の初年兵時代の教官であり、この話が事実であり、ご無事であれと心から願っていたが、どうやらこの情報は間違っていたらしい。

夜中、神無川の陣地に輸送隊が弾薬や食糧を運んで来た。もしや親戚の矢代軍曹が来ていないか尋ねたら、来ているはずだと言う。あるいはこれが最後になるかも知れず一目会いたかったが、暗闇のこつた返す中、輸送隊は出発しついに分からなかった。

師走川陣地に敵迫る

半田陣地を占領したソ連軍は次第に兵力を増強し、昼頃には敵の先頭は、師走川陣地の手前一キロ程にまで進出して来た。戦車七、八輛、一五センチ榴弾砲三、四門を中央軍道上の亜界川

橋付近まで進め、師走川陣地に対し砲撃を開始した。敵の戦闘機も飛来し機銃掃射を始めた。小銃で飛行機を撃て、との命令が出て撃ったが効果が無く、ついにはバカらしくなって誰も撃たなくなった。

砲弾も次第に陣地近くに落ちるようになった。敵情偵察のため四人の斥候を出すことになり、私もその中に指名された。

斥候の目的は、砲弾はどの辺りから撃っているかを確認するためである。浮き世の物音が何も聞こえない原始林の中なので、砲弾の炸裂音だけが物凄く大きく、すぐ近くで撃っているのかと思うことがある。

原始林の中を四人で進んで行ったら、いきなり至近距離に「ドーン」と一発撃ち込まれていたのを助かったが、ツンドラの草原に直径三メートルくらいの大穴ができた。

あんなのをまともに食らったら、「ハイ、さいなら」ですぐにもあの世行きた。

△ 続く V

編纂 佳木雄雄記

★今年の町内の大きなニュースの一つが古平信金の合併でした。大正四年(一九一五)の創業で、全道第二位の歴史を誇っていました。今年一月九〇年を経て新しい息吹の中で創業の地に新店舗が生まれました。先に貴重な図書の寄贈がありました。今回は古平信金の資料を頂きました。カレンダー、手帳を浜町代理店合併に関する各種新聞記事、封筒類、合併契約書等を越中庄司さん、旧年度のカレンダーを谷間俊彦さんより、ありがとうございます。

★近頃の天気は一喜一憂しているうちに、早一年の半分が過ぎてしまいました。長期予

報では、八月は雨や曇天の日が多いとか。台風で何十ミリという雨が降るとまた土砂災害が心配されます。いま仮に五ミリの雨が古平に降ったとしますと、水の量は一平方メートル当たり五リットルです。これは一坪の畑にバケツ一杯ほどの水をまいたのと同じくらいですが、古平町内だとどうでしょう。古平町の面積を約一八七平方キロとしますと、二〇〇リットル入りのドラム缶四、六〇〇本余りになり、古平町民(約四、三〇〇人)が赤ん坊からお年寄りまで、一人がドラム缶一本分の水をまいた計算になります。電卓はどこにもありますので、退屈しのぎに確かめてください。

町内の石碑を訪ねる

町内の石碑を訪ねる
去る七月一三日、昔懐かしい神社の祭典も終わり一息ついたところで、教育委員会主催『生きがい学級』がありました。今年の趣向は弁当持参ということ。で、久しぶりの町内散策でした。厚古岬からの眺望は草でさえ

ざられ残念でしたが、旧新地分校、古高跡をしのびながらふるふる温泉脇で弁当を開きました。参考資料として『石碑を訪ねる』(四一基・四ページ)を差し上げました。これは暫定版として百部作成したもので、その後、希望者に配布したりして残部はありませう。後日、もっと詳しい解説をつけて編集の予定です。

悠

雄詠 (八月号) 主宰 水見壽男

花吹雪髪の飾りとせしままに 山口悦子

歩を止めて見よとばかりに花開く
吾が素手に木瓜は棘もていどみけり

愛らしき雌の子猫や名は武蔵
よき晴間娘はさりげなく雛飾る

飛ぶものを疾風の如く喰ふ燕
錫杖に光滴り春の水

春めきて風に囁く草木かな
通ひ路の木の芽それぞれ色分ち

浜風にまた生き返る鯉のぼり
春の雲破り羊蹄山迫りくる

咲くを愛で散るにも惹かる花見かな
持ち寄りの肴広げし花筵

庭に来て我に目覚めよと囁れり
一湾を見渡す小径芋の花

すきまなき吉野の花の中に入る
春光を集めし岬の油風

磯遊潮の香に酔ひ風に酔ひ
磯遊小舟の飛沫持ち帰る

囀を一品とせし朝餉かな

行春のたしかな動き遠目にも
優駿が春の大地を駆け上がる

緋毛氈座して乱れる花見酒
踏み出せば草芳しき散歩道

さはさはと吹かるるばかり竹の秋
春潮の積丹ブルー見え初めし

春の日の海に尽きせぬ蒼さあり
潮の香の春を惜みて風に散る

釣竿の空高々と風光る
一湾の波にたゆたふ春の月

つまづいてさざ波立つや春の海
春潮のひきしほる音こもる音

囀を入れて眺むる日本海
海染めし四月の雨の濁川

濁流に吞まれし中州春の雨
羊蹄山の裾野より春上り行く

棲み慣れし沼との別れ鳥曇
春雷の灯台を過ぎ海に散る

夕がすみ積丹岳の鎮もれり
素潜りの海胆のありかは秘密とす

空知野のどこまでも模糊鳥曇

外山俊久

渡辺嘉之

堀典子

本間寿昭

越野清治

怒涛

【1】 古平俳句会
— 八月 —

夏潮に凜と浮き立つ佐渡島 斉藤波留

本陣で有りしは昔夏館

鈴蘭の壺にインクや青に染む 山口悦子

老鷺の一声川面をゆるがせり

祭風煽る天狗のかんな屑 越野敏雄

転任地亡妻悠然と平泳ぎ

南風吹く波止めを打つ波高し 大和田絵伊

鈴蘭は庭の音秘め咲ひてをり

一枝の葉桜愛でて回り道 高橋重子

山道を越え谷青葉酔ひしれり

緞帳に描きたくなる花菖蒲 仲谷比呂古

夏空を切つて海鳥餌受くる

手短に進む着替へや夏衣 室谷弘子

群青の沖へなだるる蟬の声

八重桜子等の遊びをいとほしむ 泉 清三

巢燕の戻り戸締り戸惑へり

浮雲が五月の風に流さるる 外山俊久

砂浜に一つぽつんと夏帽子

郭公の鳴ひて山里動き出す 渡辺嘉之

青葉には青葉の彩や匂ひ立つ

風さやぐ緑陰にゐて海遠し 堀 典子

ゆつたりと夏潮寄する岬かな

潮風と山の風あり夏小樽 本間寿昭

韋駄天の車夫に夏日の輪の光る

若葉風古稀の賑はひ乗せてバス 越野清治

葉桜となりたる丘の潮曇り



吉平町岬短歌会

ふるさとの海の輝きにあふは久し白き船一つ沖を往く見ゆ

池 田 テ ル

かず知れぬ蕾ふくらむ百合ヶ原花の盛りを想ひ佇む

鈴 木 時 子

海に浮くブイのガラス玉波うごくたびにサファイヤの光りを放つ

竹 内 コ ト

夏の海潮の香りが心地よくおだやかな波おだやかな風

田 中 香 苗

今着し贈りものの包みより友の香水のほのか匂ふも

丹 後 初 江

八合目汗垂る我れを優しくも迎へてくれるゴゼンタチバナ

寺 内 り よ う

去年買ひし牡丹の苗木に紅き芽の二つつきを朝を眺む

東 美 知

船ゆくを見つつ散策する夕べ波止場に海の風の冷めたし

堀 典 子



吉平俳句会

百選の清水ふき出すえぞの富士 斉藤波留

青空に鷺草の花飛ばせたく 山口悦子

かなな屑天狗を煽る祭かな 越野敏雄

畑仕事癒してくれし八重桜 大和田絵伊

みなぎれる水田を泳ぐ夏の雲 高橋重子

見過ごして仕舞ひさうなる青蛙 仲谷比呂古

湾を呑む千畳敷や夏の霧 室谷弘子

川の面を蹴って翔つたる霞雀 泉清三

夏の海白い帆風に打瀬舟 外山俊久

波の音入りたる網戸潮の香も 渡辺嘉之

肩の端に夏の光を止まらず 堀典子

閑道の夏草かぶる道祖神 本間寿昭

思い切り山けぶりゐる若葉雨 越野清治

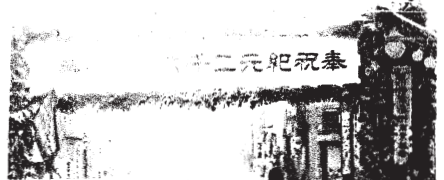
古平町史年表

昭和15年 (1940)

- ▲古平町助役河村虎雄が、余別村長に任命される
- ▲静岡市で大火があり、町内でも義援金を集める
(1月15日・焼失家屋5,100戸)
- ▲金物商組合が規約で定めた第1回目の公休日が実施される(3月1日)
- ▲一戸孝町長が退任し職務管掌に岩間勝久が任命される
- ▲一戸町長の再任署名運動が起り、署名簿を町会(町議会)へ提出審議中に鯨の群来があり、町会も一時休会となる(この年の鯨漁獲高1110石=約833ト)
- ▲奉祝・紀元二千六百年記念式典が古平小学校で行なわれ、引き続き児童や町会議員、青年団、婦人会、一般町民も参加して旗行列が行われる
- ▲記念式典行事として古平・美国連合武術大会が、午後から古平小学校で行なわれる
- ▲古平小学校で軍人遺家族慰安学芸会が行なわれる
- ▲古平尋常高等小学校鴨居木分教場が独立し、明和小学校と改称する、初代校長に森晴雄が任命される(1学級編成・教員1名・児童数62名)
- ▲北海道産魚粕の道外への移出が禁止される
- ▲カレイ刺網漁船豊漁丸が遭難し3人が死亡する
- ▲米が米穀通帳により配給制となる
- ▲古平小学校1年生の児童が港町砂止め埠頭で溺死する
- ▲小樽高商配属将校・嵯峨大佐の時局講演会が古平小学校で開かれる
- ▲古平小学校の高学年児童が、二宮金次郎銅像の土台に使う砂利の採取をする
- ▲二宮金次郎銅像の地鎮祭が行われる
- ▲古平町長に藤田善平が就任する
- ▲政府の『金』集中運動で、石井豊太郎が感謝状を受ける
- ▲紀元二千六百年記念詔書がラジオで放送され、古平小学校ではその放送を全校で聴く
- ▲築港荷揚場建設のための砂利採取に、町会議員や一般町民が勤労奉仕をする
- ▲小学校高学年児童も海岸で砂利採取の勤労奉仕をする
- ▲道から「混食米養のしおり」が各家庭に配布される



←町民から人望のあった
第八代・一戸孝町長
二千六百年記念アーチ ↓



←部落民による
校門建設作業



↑明和小学校として独立する



←二宮金次郎銅像